

フランス語の隠れたしくみ 1

ilは「彼」ではない

『ふらんす』（白水社）2004年4月号掲載

「彼」って誰？

フランス語の初歩を習うとき、誰でも最初の時間に人称代名詞 je / tu / il / elle というものに出くわす。jeは「私、僕、俺」など様々に訳せるが、1人称をさすものとしてまず問題ない。tuについてはvousとの対比で、「友人・家族など親しい間を用いる他、神への呼びかけにも使う」などと習う。それに対して3人称のil / elleについてはあまり説明がなく、文法教科書は冷たい扱いをしている。これに相当する日本語を探すと、どうしても「彼、彼女」が頭に浮かぶ。もっとも、フランス語には英語の he / she 対 it という人・物の区別がないので、il / elle が物をさす場合はもとより別の話である。

このように冷たい扱いの結果、仏文和訳のクラスでは、次のような解答に出くわす羽目になる。解答を見ずに試しにご自分で訳してみられるとよい。あなたの言語感覚の鋭敏さを測ることができるだろう。問題は下線を引いた箇所である。

(1) Aucun écrivain aujourd'hui, si jeune qu'il soit, ne peut s'imaginer qu'il a inventé le roman. Il en a lu en général des quantités, contemporains ou plutôt pas tout à fait contemporains, avec un décalage d'une trentaine d'années.

「今日ではいかなる作家でも、彼がいかに若くとも、彼が小説というジャンルを発明したなどとは思えまい。ふつう彼は山のように大量の小説を読んできている。現代小説を読むこともあるが、30年くらい昔のひと時代前の小説のほうが多いだろう。」

仏文和訳ではなく、もともと日本語で書いた学生のレポートに次のような文章を発見したときには、心底驚いてしまった。

(2) 可算・非可算とは文字どおり、数えられる・数えられない ということである。この表現はとてもわかりやすい反面、学習者をおある誤った認識に導いてしまう。すなわち彼はある名詞を考えると、その対象の物理的な性質のみから、可算・非可算のレッテルを貼ってしまうのである。

驚いたのは文章の内容ではない。内容は言語学的に見て正しいもので、満点をあげてもよい。問題は下線を引いた「彼は」である。確かに若い人たちの日本語では、ナンパするときに「彼女、ちょっとお茶しない？」などと、本来3人称である「彼、彼女」を2人称の呼びかけに使う「新・日本語用法」がある。しかし、上の例はその種の新しい用法ともちがっていて、どうやらある誤解に基づいているようだ。そ

れは il = 「彼」という誤解である。その昔、パリに客死した哲学者の森有正は、「chien は犬ではない」という名文句を残したが、私もそれにならって「il は彼ではない」と言いたいのである。

コトバをさす記号と人をさす記号

ではこのちがいはどこから来るのだろうか。フランス語で il / elle は、非人称の Il pleut. などの形式的な主語を除けば、一度出てきた名詞を受けるときに使われる。これを照応的用法という。Jean ne vient pas. Il est malade. 「ジャンは来ないよ。病気なんだ」で、il は確かに Jean を受けている。ちなみに、日本語訳で「彼」は省略されている。日本語は主語を節約する工夫を凝らした言語であるから、この場合 il は「ゼロ形式」つまり省略に対応する。ここにも「il は彼ではない」という主張する理由のほんの一部があるが、ここで述べたいのはそのことではない。主語節約の工夫に興味のある人は、野田尚史「見えない主語を捉える」（月刊『言語』2004年2月号、大修館）という記事を見られるとよい。

ここで問題にしたいのは、「彼」は基本的には「見知った人」をさすことばだということである。「田中さん、今日もやって来たよ」に対して、「彼、何と言った?」と応答するのは自然である。「彼」は私も知っている「田中さん」をさす。ところが、「今日知らない男の人が君を訪ねて来たよ」に対して、「彼、何歳くらいだった?」と応答するのは不自然である。私は知らない人について「彼」を用いることができないのだ。一方、フランス語にはこのような制約がない。

(3) A : Ecoute, il y a un type qui aimerait bien partir en vacances avec toi.

B : Eh bien, qu'est-ce qu'il me propose ?

話し手Bは自分の知らない人 un type について il を用いている。日本語なら「その人、何をしようと言ってるの?」とすべきところで、「彼、何をしようと言ってるの?」は、いかに新・日本語用法に馴染んだ若い人にも抵抗があるだろう。

なぜフランス語と日本語にこのようなちがいがあるのだろうか。ここに連載のタイトルにもしておいた「隠れたしくみ」が関係しているのである。il / elle は「コトバをさす記号」である。先にあげた例をもう一度使おうと、Jean ne vient pas. Il est malade. で、il は“Jean”というコトバをさしている。一方、「彼」はコトバではなく「人をさす記号」なのである。「田中さん、今日もやって来たよ」「彼、何と言った?」という応答で、「彼」は「田中さん」というコトバをさしているのではない。コトバを通り越して、旧知の田中さんという「人」を直接にさしているのである。これを小難しく言うと、il は言語的にコントロールされた先行詞を持ち、「彼」は語用論的にコントロールされた先行詞を持つということになる。わかりやすいように次の例を見てみよう。別役実を思わせるシュールな小話である。

(4) Lors d'un dîner, l'entrecôte a disparu. On accuse le chat, et on a l'idée de peser la bête.

Elle fait juste cinq livres, le poids de la viande qui a disparu. C'est donc **lui** le coupable.

Mais, dit alors quelqu'un, où est le chat ?

「夕食時にサーロイン・ステーキ用の肉がなくなってしまった。猫の仕業だろうということになり、猫の体重を量ることにした。体重は2,5kgで、ちょうどなくなった肉の重さだった。じゃあ、やっぱり猫の仕業だ。すると誰かが言った。でも、猫はどこへ行った?」

猫は最初は男性名詞 le chat として登場しているが、太字の elle は、それを言い換えた la bête を受けている。注意すべきは、この時点で猫の性別は一切関係ないという点である。メス猫だから elle を使ったのではない。あくまで la bête というコトバをさすために、それと性数一致する elle を使ったのである。その証拠に、もう少し先では同じ猫を今度は男性形の lui でさしているではないか。

ちょっと横道に逸れるが、この lui は何をさしているだろうか。これは男性形だから最初に登場した le chat をさしているという解答は、決してまちがいではない。フランス語のクラスなら丸をあげるところだ。話をややこしくするようで恐縮だが、実はこの lui は le chat というコトバではなく、オス猫を直接にさしているともできるのである。しかしこの問題は、何回か後にお話するという予告編に留めて、何行か上に戻ろう。フランス語では、代名詞 il / elle は「コトバをさす記号」だということである。

フランス語のこのようなしくみを保証しているのは、発達した名詞の性・数というカテゴリーと、それと呼応する代名詞のしくみである。代名詞は意味内容のないコトバなので、さしているものを判別するには、単数が複数か、男性か女性かといった区別に頼るしかない。フランス語はこれを可能にした。ところが、日本語には名詞のレベルで性や数の区別がない。だから、日本語の人称代名詞「彼、彼女」は、「コトバをさす記号」ではなく、コトバを通り越していきなり「人をさす記号」としてしか働くことができないのである。

遠い記憶が「彼」

このように、フランス語の il / elle は「コトバをさす記号」なのであるから、さしている人を私が知っているかいないかは関係しない。先行詞との性・数の一致があるだけである。ところが日本語では、「彼、彼女」は「人をさす記号」であるということに加えて、「知っている人をさす」というもうひとつの制約がある。この制約は上に説明したことからただちに出て来るわけではない。これは「彼、彼女」の歴史的なりたちに関係している。「かれ」はもとは「あれ」と同じである。「山のかなた」を古くは「山のあなた」と言うように、遠い場所をさすことばだった。詳しい説明は省くが、「遠い場所」は「知っているもの」に通じる。これが、「彼」が「知っている人」をさすはるかな理由である。

このため、日本語とフランス語のちがいは、次のように aucun, chacun などを含む例でいちばん目立つのである。「彼」を使うと、全然別の人をさすことになる。

(5) Aucun écrivain ne dira qu'**il** a inventé le roman.

「どんな作家といえども、{×彼/ 自分}が小説を考案したなどとは言えまい」

(6) Chacun défend **son** bifteck.

「めいめいが{×彼/ 自分}の利益を守る」

ではフランス語で il/elle は言語的コントロールを受けているので、いつでも一度登場した名詞をさすのか。ある日のこと、猛スピードで坂を下る自動車を苦々しげに見て、かたわらのフランス人が Ils roulent comme des fous! 「あの連中ったら、とんでもない運転をするんだから!」と叫んだ。ここに先行詞はない。「これはどうなるんですか、先生」おととと、困ったな。というのが、次回のテーマである。

(とうごう・ゆうじ)